

大會抄錄

清代官僚制下における考成と挪移の關係

小野達哉

清代の地方では、税糧の徴收・上供にからんで、大きな社會問題が引き起こされていった。この報告では、考成（案件を期限どおりに處理できたのか否かによつて官僚に賞罰を課す制度）・挪移（税糧の項目の付け替え）について、こうした問題の背景となる状況や、これら考成と挪移の關係を取り上げることについて。

考成が税糧徴收へ順次適用されてゆくのにともない、州縣は税糧全額の徴收を義務付けられた上に、不足を出した場合には、革職・降格を含む厳しい處分を課せられるようになった。さらに、州縣では、その年度の徴收額（經徵）のみならず、それ以前の年度の未徴額の徴收（帶徵）まで義務付けられたため、知縣は過重な徴税義務の負擔に苦しめられることになったのだという。しかしそのいっぽうで、こうした考成の強化に表裏する動きとして指摘しなければならぬのが、挪移の盛行である。これは、税糧項目の付け替えによつて、知縣が處分を課せられるのを免れようとしたもので、考成の實效性を低下させる働きをなすものだと、まず指摘することは可能だろう。しかし、制度の運用面に即してみると、考成と挪移の關係は、こうした指摘だけで十分に捉えき

れるといえるだろうか。

この報告では、考成・挪移のあり方をめぐる規定や論議、さらに雍正時代の奏銷冊の分析を踏まえ、主に制度運用の側面から、考成と挪移の關係を、清代官僚制の運用構造の中に位置づけることを目指してゆきたい。

東魏北齊革命と『魏書』の編纂

佐川英治

『魏書』は東魏北齊革命の翌年に文宣帝高洋の敕命で魏收が編纂した「正史」であるが、上奏の直後から「穢史」の非難を浴びたことでよく知られており、『魏書』の研究も「穢史」の眞偽をめぐる問題を中心におこなわれてきた。しかし『魏書』本来の目的からすれば、穢史問題はむしろ枝葉の部分に發生した問題で、北魏史の正史としての最も重要な役割は、孝文帝の漢化政策を武斷政治から文治政治への轉換點と位置づけ、そのもとの胡漢對立の解消を最大限の評価とともに描き出すことにあったと考える。その目的はいずれも魏齊革命と深く絡んでおり、第一に、元氏から渤海高氏、すなわち胡から漢への政權委譲であつた魏齊革命を正當化すること。第二に、西魏との正統性をめぐる争いにおいて北齊の正統性を主張すること。第三に、高氏への權力集中を促す山東士族が漢文化の正しい繼承者として政治の主導權を確保し、高氏の權力集中に批判的な國內の「勳貴」勢力を抑え込むことが